二〇一三年一一月二九日

錦繡の峡二分けす一瀑布　せいじ
風花の乱舞茶房の玻璃越しに　こすもす
水の面に風紋走る鴨の池　三刀
粧へる山近づけて湖静か　ぽんこ
瀬の楽の呂律に沿ひて紅葉狩　菜々
堆く供養待つ筆寺小春　はく子
山荘の片屋根覆ふ散紅葉　うつぎ

二〇一三年一一月二八日

健脚に遅るるもよし紅葉狩　せいじ
朱の欄に凭れて愛でる寺紅葉　つくし
朝練の部活の子らの息白し　宏虎
石庭にかつ散る紅葉穢となさず　よし子

二〇一三年一一月二七日

錦繡の真つ只中に珈琲館　はく子
地獄谷へと標立つ落葉道　菜々
黄落の旧居留地をたもとほる　有香
抽ん出し千年杉や寺紅葉　せいじ
冬紅葉弁天堂の裏山に　菜々

二〇一三年一一月二六日

神殿を会所に老いの日向ぼこ　治男
重荷負ふ友の笑顔や石路の花　よう子
紅葉山夕日を帯びて炎上す　菜々
結界の竹真新し紅葉寺　なつき

二〇一三年一一月二五日

棟上げの槌音高し小六月　三刀
境内の紅葉明りに推敲す　ひかり
忘年会手作り料理持ち寄りて　満天
紅葉寺おでん屋台の混みにけり　はく子
遊子われ賀茂の川原に日向ぼこ　雅流

二〇一三年一一月二四日

久闊の集ひの卓のあたたかし　よし子
新海苔の缶の封切るとき香る　よし子
路地小春稚児のお練りの笛太鼓　菜々
七五三パパは専属カメラマン　有香
と見る間に筋雲褪せる冬夕焼　せいじ

二〇一三年一一月二三日

漆黒の海より上がる冬の月　なつき
谷戸の軒レースのごとく大根干す　宏虎
水鳥の水尾煌めかす夕日かな　さつき

毎日句会みのる選・二〇一三年一二月二日